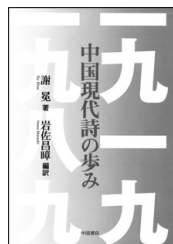


現代史の暗部から絞り出された 人の声のアンソロジー

佐藤 普美子

謝冕著／岩佐昌暉編訳
中国現代詩の歩み



A5判 352頁
中国書店 [4725円]

日本では漢詩と呼ばれる中国伝統詩の愛読者は決して少なくないが、現代詩となると現代中国の社会と文化に関心を抱く人々でもまずほとんど読む機会がない。現代詩の読者が少ないのはどの国でもほぼ同様だが、特に中国文学の場合、伝統的古典詩歌が圧倒的な質量を誇り、今なお鑑賞に堪える偉大にして身近な存在であることが、現代詩をいっそう貧弱に見せているという事情もある。

それでも振り返れば、二〇世紀以来の激動する中国社会において、五四新文化運動に先鞭をつけたのは胡適らの「新詩」（＝口語自由詩）の提唱であつたし、文化大革命終息後の八〇年代の思想解放運動を象徴する事件は、北島・舒婷ら「朦朧詩」の出現であつた。現代中国にあつても、詩歌は文化・思想のパラダイム転換に深く関わっていて、また詩歌の伝統は

人々の生活や意識の中に形を変えてはいり込み、息づいていくといえる。

本書は、こうした二〇世紀中国現代詩の全体像を「通史＋アンソロジー」の形で日本に紹介した初めての試みである。日本では五〇年代から六〇年代にかけての一時期、革命中国への憧憬から、艾青（今や若い世代には艾未未の父と言った方がわかりやすい）を中心に、新詩が同時代の息吹を伝えるものとして積極的に紹介されたこともあった。しかしその後、詩史的論考はもちろん、各時代の作品をこれだけまとめた読める機会とはほとんどなかった。著者は長く中国現代詩研究界をリードしてきた北京大学中文系の謝冕教授（一九三二—）で、その名は「文革」終息後の（当時「看不懂」と非難された）「朦朧詩」を擁護したことでもよく知られる。本書はその論

考の中から特に三篇を選び、五四運動期から八〇年代末までの現代史と絡み合う新詩の歩みを通観できるように編集したもの。全体は三部から構成され、第一部「中国現代詩の歩み（一九一九―一九四九）」では、古典詩的発想と訣別すべく西洋詩の薫陶と啓発を受け、さらに侵略戦争という現実の中で、口語による「現代的」表現を模索し続ける詩人たちの苦闘が紹介される。続く第二部「新中国と共に歌う 建国三十年詩歌創作の回顧」は、「建国」後の社会建設の中で詩作と「現実」が緊密な結びつきを求められる中での詩人たちの様々な模索や苦悩が紹介され、第三部「八〇年代の中国詩」は「文革」終息後のいわゆる朦朧詩をはじめ八〇年代の新詩潮に言及する。

本書紙幅の七割を占める第一部の底本となる謝冕の通史「二〇世紀中国新詩概略・一九一九―一九四九」はもともと『中国大百科全書』（中国文学分冊）一九九二年のために書かれているため、作品の引用はなく、簡略過ぎて生気に乏しい。編訳者は、著者のこのオーソドックスな新詩三十年の概観を基本的骨格として、できるだけ多くの作品で肉付けすることにより、二〇世紀中国現代詩の歩みを血肉化、動態化しようとしたといえる。敬服するのは翻訳された作品の多さだけではない。本文で作品が紹介される全ての詩人に附された経歴、

そして第二部、第三部の詳細な訳注は、作品成立のコンテクストを理解するための解説の役割を十分に果たしている。また、文学史に名を連ねる詩人たちの代表作はもちろん、近年注目される四〇年代「九葉派」詩人九人全員の詩を悉く訳出し、「九葉派」の特色を浮き彫りにしている。編訳者のこうした「徹底した作品主義」とでもいうべき姿勢は、現代詩の經典的作品以外に対しても同じ扱いをさせている。今ではほとんど忘れ去られたような一九三〇年代から四〇年代にかけての抗戦詩歌、朗誦詩や長編叙事詩がふんだんに訳され、本書に訳出されることがなければ、おそらく私たち日本人読者の目に触れることはなかった作品も多い。たとえば抗日戦下、創作を開始した青勃（一九二―一九二）の小品「ナズナ齊齊菜」――「最後に降った雪が溶けた／空の晴れた好天の日／村の女たちは／湿った田野に駆けていく／田畑と原野では／ナズナ齊齊菜が芽吹いたところ／緑の頭髮を突き出している／飢えた人民は／痩せこけた手で／掘り出し土や泥ごと籠に入れる」（一九四二年河南）。七十年前の戦時、中国河南の村に広がる初春の光景と飢えの中での生への意志。また、五五年に胡風分子（胡風反革命集団のメンバー）として逮捕され、六七年に獄死（八二年名誉回復）した阿垲（一九〇七―一九六七）の、後に「七月派」（抗戦期、胡風の編集する雑誌に拠った詩人たち）を語る時にしばし

中国研究所 会員制度のご案内

当研究所は、中国およびアジア諸国との友好を願う立場から、現代中国の政治、経済、社会、文化、歴史を科学的に研究する民間研究機関として、1946年1月に創設されました。以来今日にいたるまで、出版物の編集発行、専門図書館の運営を活動の柱とし、日本における中国の調査・研究の拠点として歴史を重ねてきました。

中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。当研究所の趣旨をご理解の上、入会をご検討いただけますよう、何卒よろしく願い申し上げます。

60年以上の歴史を有する研究所として、会員の皆様により充実したサービスを提供できるよう努力してまいります。

【研究会員】

会費：9,600円(1年間)

学生会員：5,000円(1年間)

【会員特典】

- ・当研究所発行の学術月刊誌『中国研究月報』の無料配布
 - ・当研究所主催の公開講座等の参加料割引
- 詳細はお問い合わせください。

一般 中国研究所 社団法人

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp/>

ば引用される印象的な一節「無題」の最終二行——「一枝の白い花になりたい——／なぜなら私はこう宣言したいからだ『われら罪なし』と。そうして私たちは枯れ萎れよう」(四四年九月)。凜とした意志を秘めたさりげない言葉と、政治に翻弄され続けた阿壠の一生がオーバーラップし、概念ではなく現実感に満ちた「声」として響いてくる。

三部の各文章は本来ばらばらに執筆されたものだが、こうして編者の手により並べられると、改めて著者謝冕の一貫した現代詩観——新詩は五四以来「現代化」を追求し、その過程で同時代文学及び伝統文学との関係を回復していること——が見えてくる。その一方で、やはりつぎはぎされた印象も否めない。建国後の詩史である第二部「新中国と共に歌う」「底

本は『共和国的晨光』(遼寧・春風文芸出版社、一九八三年六月)所収は、三部の中では執筆時期が一九七九年と、一番早い。訳者は、この文章が文革終息直後の「希望にあふれ、過去を再検討する気風」(「訳者あとがき」)が漲る時代に書かれたことを喜ぶのだが、著者の熱を帯びた語り口が、第一部の抑えた叙述とは断絶を感じさせ、その一方で、第一部(二五七頁)と第二部(二四八頁)の阮章競の長詩「漳河水」についての論述が重複しているなど、一冊の書として読むときには統一感をやや欠いている。

第二部第三章で、著者は共和国の詩の繁栄と発展に貢献した詩人として郭小川と賀敬之を挙げ、言葉を費やし彼らの詩歌創作における「誠実」と「嚴肅」を強調し、「氣宇壮大」な「時代の鼓手」だと称える。ただ引用された詩からはそれを裏付

ける言葉の質を感じ取ることは難しい。その後、彼らを模倣する「政治抒情詩」が次々生まれ、文革以降はただの空疎で大きな「スローガン詩」に堕していったことも指摘している。郭・賀とそのエピソードとの間には決定的相違があるにせよ、彼らの抒情スタイル、言語感覚についてはもう少し批判的考察がほしい。この点、訳者の見解はどうなのだろうか。著者への異論の有無にかかわらず、訳注(三〇四頁)で萩野脩二の専論の存在に言及するならば、その鋭い指摘(「郭小川の」言葉の直接的な伝達面のみを問題にする態度」(萩野脩二『中国現代文学論考』一五四頁)を紹介してもよかったのではないだろうか。著者のきめ細かな読みは、むしろ第二章第二章と第三章の邵燕祥の論じ方に現れている。特に彼の文革終息直後の作品「中国にまた詩が生まれた」(一九七八)が、喜びの中にも哀悼を含み、強烈な憤怒とアイロニーに貫かれているという同時代人ならではの鋭敏な考察には説得力がある。

第三部は講演録の「要約」で、編訳者も「あとがき」で断わるように、叙述の分量が不十分で、第一部、第二部とはつり合いが取れない。それはともかく、著者の「朦朧詩」以降の詩への理解はやや短絡的である。八〇年代中期以降、(北島や舒婷らの朦朧詩とは異なる創作の立場を掲げた)極度に「個人化」され「神聖さ、崇高感」を欠く詩について(そのスタ

イルは九〇年代詩歌の特色である)、例えば韓東(一九六一)の「大雁塔について」——「ぼくたちに何を知ることができるだろう／たくさんの人たちが遠くからやつて来る／上って行って／一回だけ英雄気分を味わうためだ……」に對し、著者は、反逆的心理が「価値あるものの意義を取り消し凡庸化する」表現だとみなす。だが同作の画期的意義はむしろステレオタイプの抒情パターンへの反逆、自動化された日常的行爲へのアイロニカルな視線にある。著者は現在(執筆当時は九〇年代半ば)の詩が、「激情を表現せず、世界に冷淡な詩」か「個人のちっぽけな感情や感慨を述べる詩」が多すぎるとして、「詩が公衆の生活、社会の状況に関心を持たなくなったら、詩が美に関心を持たなくなったら、中国の詩には何か欠けてしまうのではないか」と憂慮する。それは杞憂と決めつけられないまでも、同時代詩批判としてはいささかナイーブにすぎる。権力構造が微妙に絡み合い複雑化する「公衆の生活」や「社会の状況」そして溢れるコトバの中に身を置く敏感な文学者にとって、詩による現実感の表現がますます困難になっている今日、「理想を持ち、使命感を持った、意義のある詩を書こう」という呼びかけはどこか空疎に響いてしまう。

最後に翻訳について。大量の詩の翻訳作業は想像以上に骨

の折れるものだったに違いない。それゆえの遺漏はいちいち挙げないが、少しでも気になる点を指摘しておきたい。たとえば四〇年代延安での李季の代表作「王貴と李香香」は「信天遊」（陝西省北部の民謡形式）を用いた長詩だが、すでに原詩のリズムを反映したすぐれた翻訳（秋吉久紀夫編訳『中国現代詩集』所収、飯塚書店、一九七四年）が存在する。リズムミカルな調子を読者に伝えるには、より民謡調の秋吉訳を参照してもよかったのではないか。また、穆旦詩の解説に「ここにはイデオロギーの影はない。あるのは、一種の純粹な、中国の久遠の風土人情に対する、濃厚な泥土の匂いをする嘆息である。（*）彼は表面的に苦難を強調したりはしない」（二三四頁）とある。訳者が解説に援用した謝冕『新世紀的太陽——二〇世紀中国思潮』の原文では、（*）の箇所に「穆旦用純粹西方的方式传达了純粹的中国风情」の一行が入る。ここは穆旦詩が古典詩の伝統的方法から断ち切れていることを指摘した核心に触れる部分で、訳者はあえて省くべきではなかったと思う。

本書に訳出された詩の多くは、中国現代史の中で、ともすれば時代の大音声にかき消されそうな声、歴史の暗部から絞り出された声である。一人の人間の切実な営みから生まれる声は個人の内部から発せられ、しかも個人にだけ属すのでは

ない。時空を超えて、それらに耳を澄ませていると、古典詩とはまた違う中国現代詩の風景が開けてくるだろう。

（さとう・ふみこ 駒澤大学）

第4回学術シンポジウム「中国言語文化の新展望」

▼日時・11月17日（土） 9時10分～17時20分 ▼場所・大東文化大学板橋校舎（東武東上線東武練馬駅下車、大東文化会館よりスクールバスで約7分） ▼研究発表・陳小珍『《文選集注》五臣音注考』、藤本健一「裁判」と「審判」の造語と日中語彙交流、洪安瀾「連語論から見る『在+空間詞』の『在』の日本語訳」、蔡娟「宋代白話文獻における動補構造の『將』、范常喜「九店楚簡《告武夷》補遺议」、大島吉郎「腿也直了。考」、管寧「阿蘇神社と阿蘇十二神について」、山口直人「日语否定句带副词性成分时的歧义现象及其相关汉语句子」、中村浩一「量詞について」